

2008年10月25日(土)

シンポジウム「学生調査から見える大学の教育」

入学前の学習活動・ 自己評価データの活用

— 新入生調査 (JFS 2008) 速報 —

杉谷祐美子 (青山学院大学)

1. 新入生調査 (JFS 2008) とは

- 大学生調査研究プログラム (Japanese Cooperative Institutional Research Program=JCIRP) の一環
- カリフォルニア大学ロサンゼルス校高等教育研究所 (UCLA, HERI) の許諾を得て、CIRP Freshman Survey (TFS) をもとに日本版を作成
- 2004年からJCSSの開発に着手し、2008年にJFSを開発
- 全大学全学部を実施を呼びかけ、2008年6～7月に実施

CIRP、JCIRP の特色

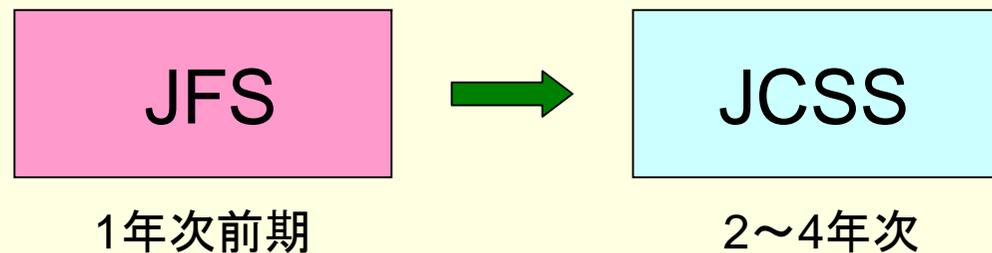
- 情緒的、認知的側面を重視
- 長期にわたり、継続的に実施
- 複数の機関が参加し、比較可能
- 学生の追跡調査が可能
- 調査項目が豊富で汎用的

CIRP と JCIRP の違い

■ CIRP



■ JCIRP



JCIRPを何のために利用するか

- 大学教育の改善・改革
- 学生支援の充実
- 入学志願のマーケティング
- 認証評価（自己点検・評価活動）
- ベンチマーキング
- 国際比較

JFS 2008の調査項目

- 属性(1～4)
- 専門分野(28)
- 高校時代の成績(6)
- 出身高校(7)
- 受験(10、13)
- 志望順位、進学理由(11、12、20)
- 家族(16、19、32)
- 学費(17、18)
- 通学、住居(5、33)

※()内は設問の番号

JFS 2008の調査項目

- 高校3年次の生活時間(21)
- 高校3年次の経験(22)
- 入学前の履歴、学習活動(8、9、24)
- 学習支援(14)
- 能力の自己評価(23)
- 価値観(25)
- 今後の学生生活(30)
- 卒業後のキャリア(15、26、27)
- 大学、学生生活の満足度(29、31、34、35)

※()内は設問の番号

IDの暗号化

姓 (2文字)		名 (2文字)		生 年 月 日				血液型	
				月		日			
姓をローマ字で書いたときの最初の2文字		名をローマ字で書いたときの最初の2文字		ひとけたの場合は左欄に0を記入		ひとけたの場合は左欄に0を記入		A型の方はAX B型の方はBX O型の方はOX AB型の方はAB 不明な方はXX	

【例】吉田綾子さん・8月25日生まれ・血液型B型の場合

姓 (2文字)		名 (2文字)		誕 生 日				血液型	
				月		日			
Y	O	A	Y	0	8	2	5	B	X

2. JFS 2008の全体集計結果(速報)

- JFSはA.アスティンの“I-E-O モデル”における“I(=既得情報)”にあたる
- 今回の分析：
 - 個々の学生の入学前の学習状況の把握
 - 学習指導の際の留意点の検討
- 分析の視点： 高大接続の観点から
 - 入学者選抜の方式
 - 一般選抜(一般入試、センター試験)
 - 特別選抜(推薦、AO選考、内部進学)
 - 高校時代の成績
 - 上位／中位(中上位・中位)／下位(中下位・下位)

今回使用するJFS 2008のデータ

■ 参加申し込み大学(9月4日時点)

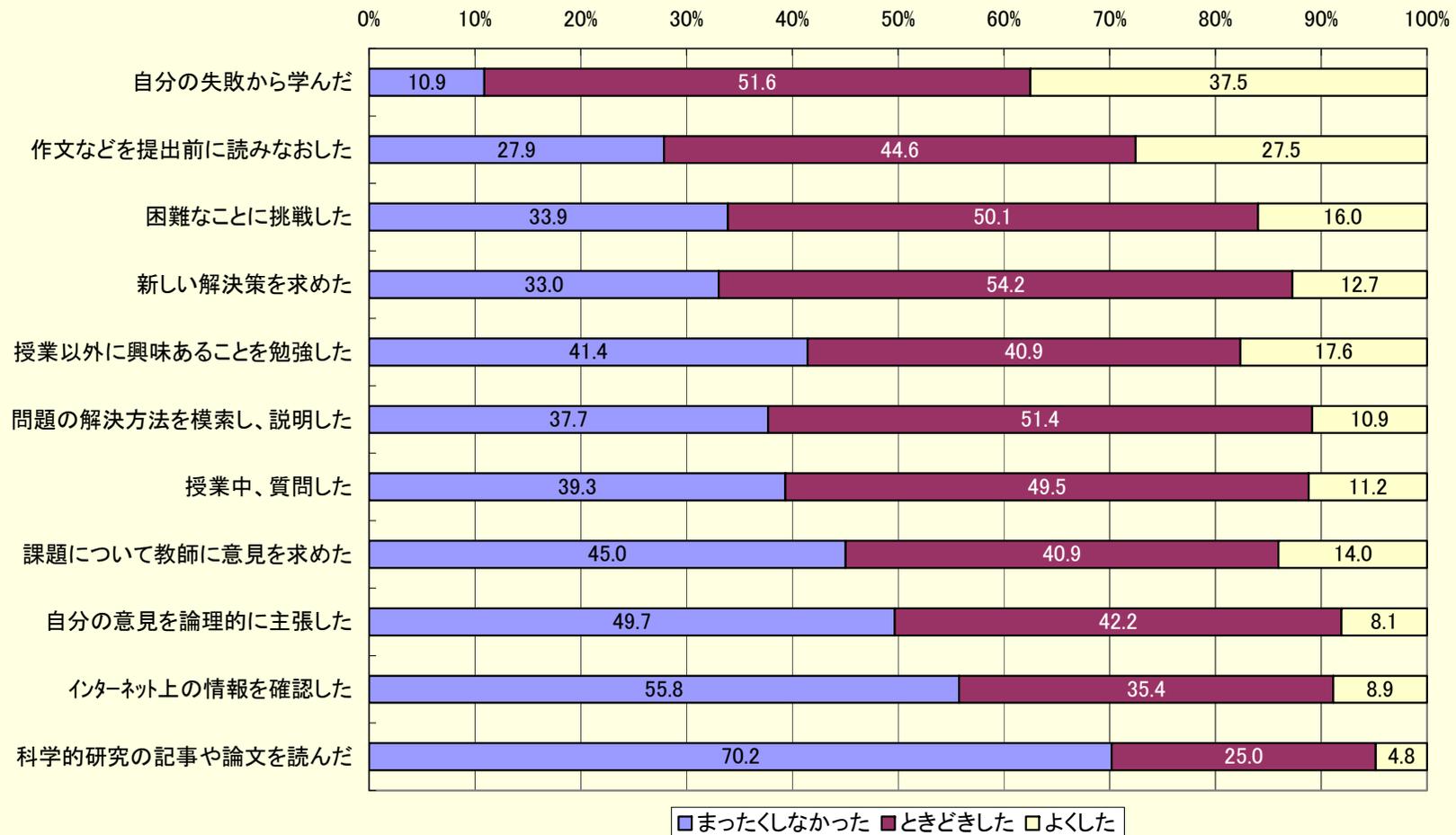
	国立	公立	私立	短大	計
大学数	22	13	101	1	137
学部数	32	16	121		169

■ 9月15日入力分まで

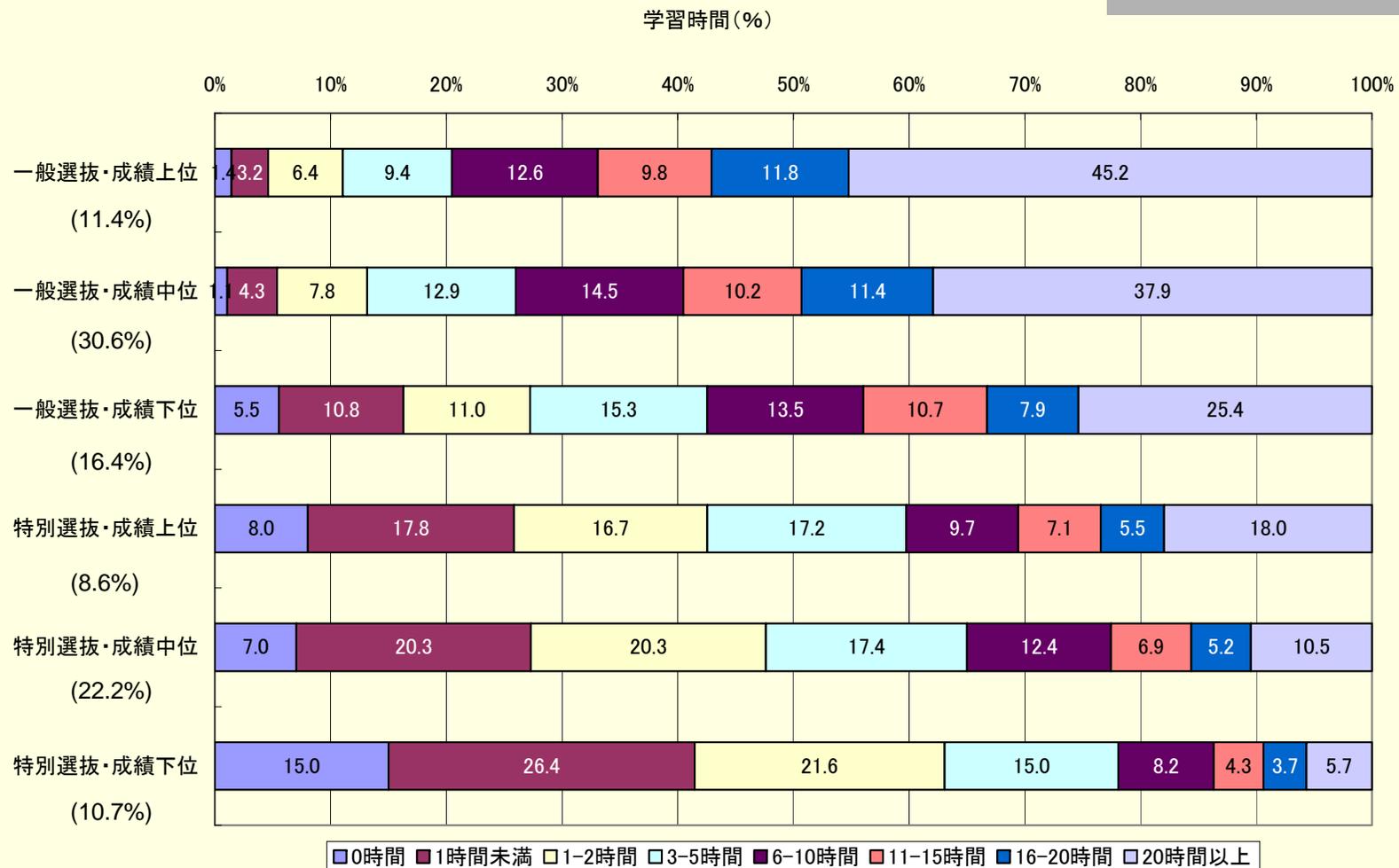
	国立	公立	私立	短大	計
大学数	15	9	52	1	77
学部数	19	10	61		90
回答者数	2629	625	6510	120	9884

高3の時に、授業以外の勉強、授業中の質問を「まったくしなかった」学生は約4割 困難なことに挑戦したことがない学生は約3分の1

高3時の学習活動(%)

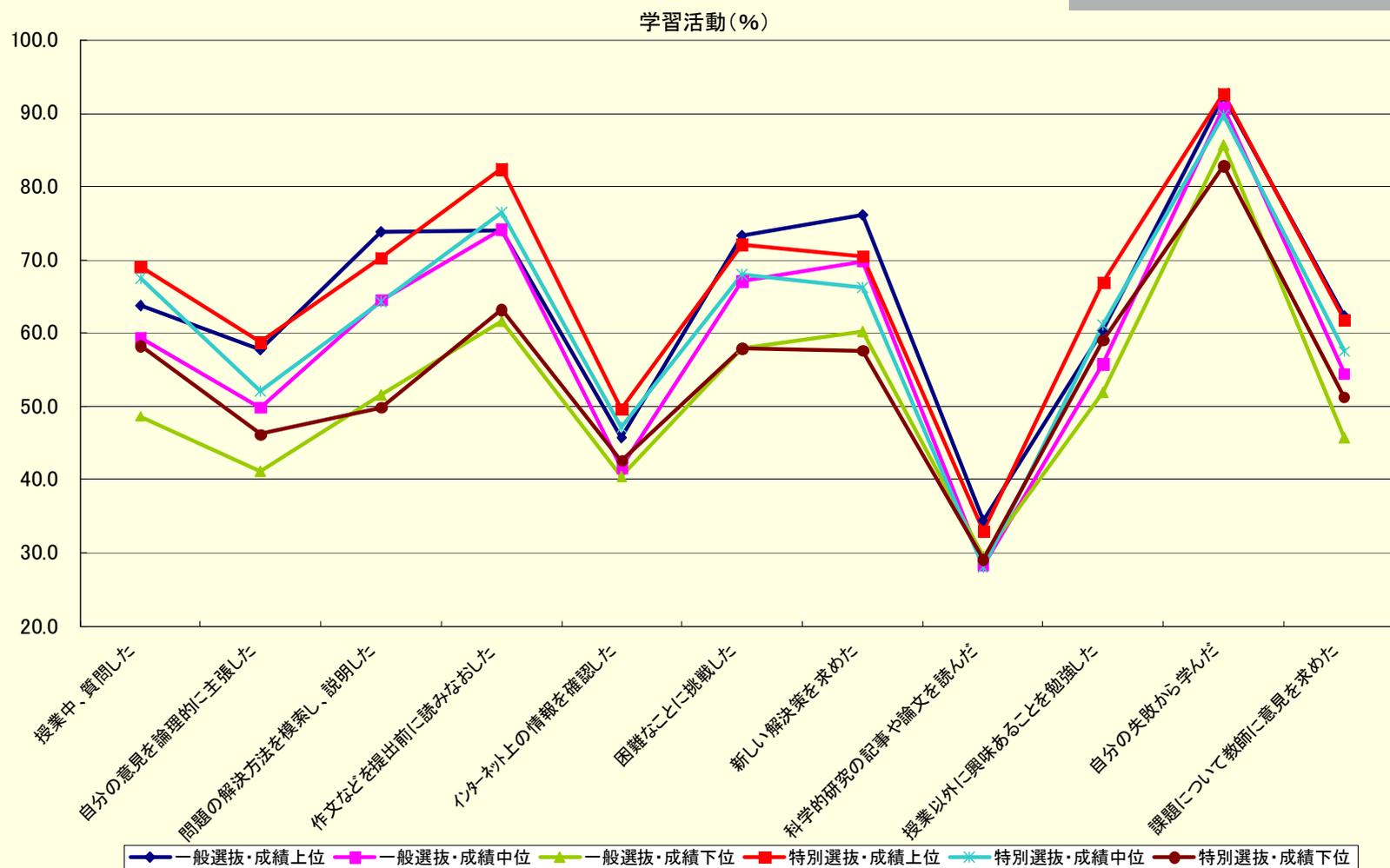


学習時間は一般選抜・成績上位⇒特別選抜・成績下位の順序で減少
 どちらの選抜方式も成績上位と中位において、学習時間の少ない層の
 比率に大きな差はない



()内の値は各類型が全体に占める比率

特別選抜・成績上位者は、一般選抜・成績上位者に匹敵
 一般選抜・成績下位者は、特別選抜・成績下位者よりも下回る項目がある
 ある
 項目によっては類型間の差が大きい



「よくした+ときどきした」の合計

差が大きい項目は学力・能力・意欲が中心
 知的面での自己評価は一般選抜が高く、意欲は特別選抜が高い
 特別選抜・成績上位者の自己評価も高い

自己評価： 類型による差が大きい項目 (%)

	一般・上位	一般・中位	一般・下位	特別・上位	特別・中位	特別・下位
学力	47.6	26.5	15.1	20.0	8.5	3.1
一般的な教養	39.1	28.6	24.4	27.7	19.2	15.2
知的面での自信	33.7	19.5	15.2	18.6	11.7	10.2
競争心	47.6	37.0	29.7	43.7	34.8	33.7
数理的な能力	26.9	18.3	16.0	14.4	12.3	9.2
やる気	41.3	38.7	29.6	47.1	40.6	38.2
読解力	30.7	27.0	23.5	24.3	18.6	16.4
チャレンジ精神	39.5	34.4	30.1	43.8	38.0	38.5
体の健康	40.5	40.9	37.5	48.7	46.4	44.7
文章表現の能力	21.5	18.9	16.8	23.3	14.8	12.8
コンピュータの操作能力	19.7	14.6	15.2	25.1	19.0	16.5
自己の理解	40.0	32.9	30.3	39.8	31.9	29.5

「上位10%」+「平均以上」の合計
 ピンク色が最も値が大きいセル、黄色が次に値が大きいセル

差が小さい項目は協調性や他者理解が中心
 全般的に特別選抜・成績上位者が高い
 項目によっては、特別選抜・下位者も高い

自己評価： 類型による差が小さい項目 (%)

	一般・上位	一般・中位	一般・下位	特別・上位	特別・中位	特別・下位
情緒面での安定度	32.1	28.4	25.0	33.1	27.9	22.7
芸術的な能力	26.7	21.1	19.7	20.7	20.0	17.7
リーダーシップ	25.6	20.1	18.2	27.2	20.6	21.7
他者の理解	34.7	33.9	28.9	36.6	34.4	31.5
社交面での自信	27.0	26.0	25.1	31.0	27.5	27.6
プレゼンテーションの能力	15.8	11.6	11.4	15.1	12.8	11.7
宗教心や精神性	10.6	8.3	8.0	12.1	9.7	8.7
協調性	37.3	38.8	30.2	38.8	36.2	32.8
創造性	28.5	25.0	25.4	28.3	25.8	28.7

「上位10%」+「平均以上」の合計
 ピンク色が最も値が大きいセル、黄色が次に値が大きいセル

特別な学習支援の希望は入試方式・成績によってほとんど差はない
 入試方式・成績よりも専門分野の別で、必要性を感じている様子

特別な学習支援の希望(%)

	一般・上位	一般・中位	一般・下位	特別・上位	特別・中位	特別・下位
文章表現	54.2	54.0	51.9	53.5	56.3	49.3
数学	30.1	30.4	30.7	34.2	36.6	33.7
理科	30.5	30.8	32.0	36.7	33.7	31.5
英語	57.5	58.4	53.0	58.4	60.2	50.3

特別な学習支援の希望(%)

	人文	社会	理工	医療	家政	教育	芸術	情報
文章表現	63.3	62.1	40.4	42.6	52.1	59.1	53.1	47.4
数学	21.7	29.3	46.4	31.2	30.8	33.4	14.9	46.6
理科	19.7	19.5	53.8	54.1	61.2	30.1	16.4	27.1
英語	67.7	63.4	45.7	54.4	42.8	59.1	50.4	50.8

学習態度が積極的な学生ほど特別な学習支援(学習補助
や補習授業)を求める

学習態度が積極的な学生ほど、能力の自己評価も高い

特別な学習支援の希望(%)

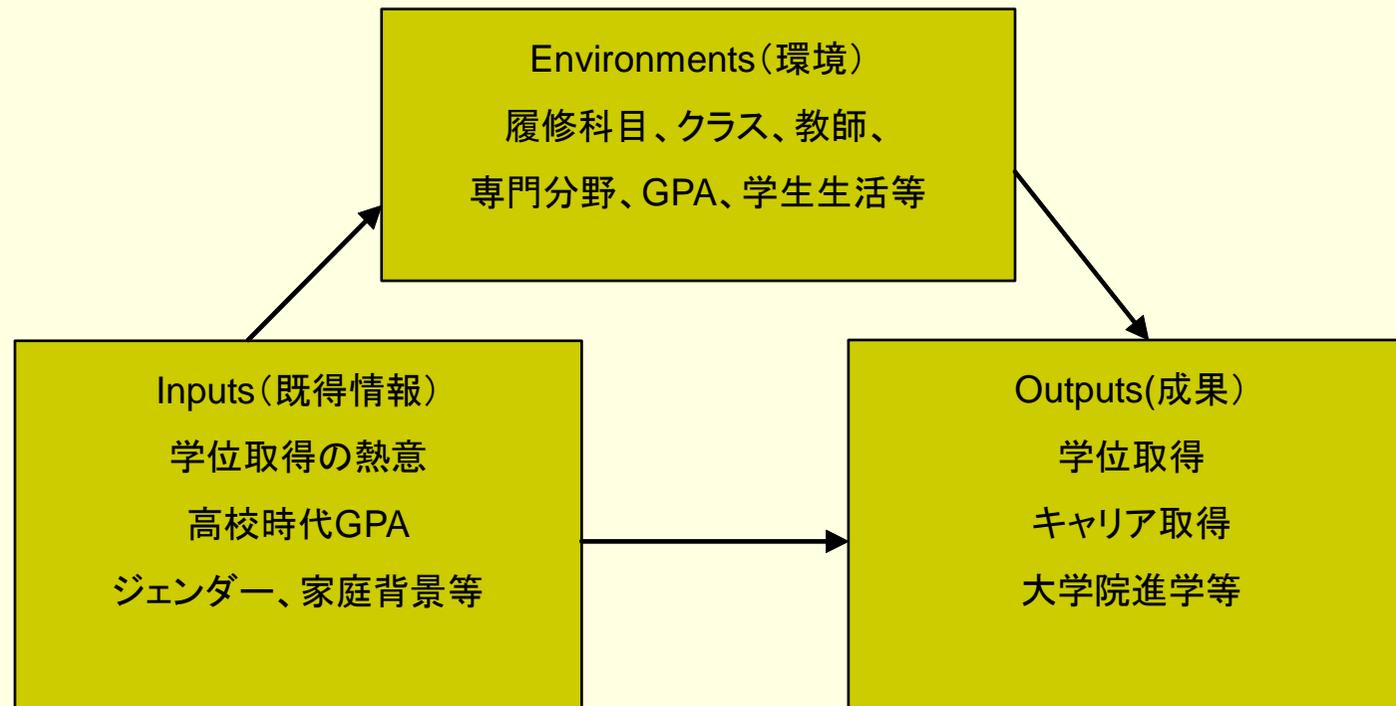
	学習態度消極的	学習態度中間	学習態度積極的
文章表現	44.1	54.1	65.0
数学	25.0	32.7	41.0
理科	25.8	32.1	40.6
英語	45.8	57.6	69.1

学習活動10項目(「科学的研究の記事や論文を読んだ」を除く)について、各項目3点満点(1=まったくしなかった、2=ときどきした、3=よくした)で合計値を算出。10~15点を「学習態度消極的」(全体の29.9%)、16~20点を「学習態度中間」(同45.3%)、21~30点を「学習態度積極的」(同24.8%)と分類。

まとめ

- 意欲・学習活動は二極化(それぞれに応じたサポートが必要)
 - 一般入試、特別入試の区別だけで学習支援を検討するのは不十分(一般選抜の成績下位者への配慮、特別選抜の成績上位者の意欲等の尊重)
 - 学習支援に対する希望は、入試方式・成績の影響よりも、大学教育・専門教育にふれて意識する
 - 学習態度が積極的な学生ほど学習支援を求め、学習支援が必要なはずの消極的な学生が求めない
- ⇒ 早期に個々の学生の学習状況やプロフィールを把握し、学習指導の対応を検討することが重要

アステインのI-E-Oモデル



入学後に挽回はきくのか？
… Iを統制してEの効果を検証
⇒ JCSS

山田科研報告書(2008), p.9

3. 個別大学でのJCIRPの活用方法

■ 各大学へのJFS 2008データの送付

- 各大学の単純集計
- 全大学の単純集計
- 各大学のローデータ

CD-ROMに入れて
1月頃送付予定

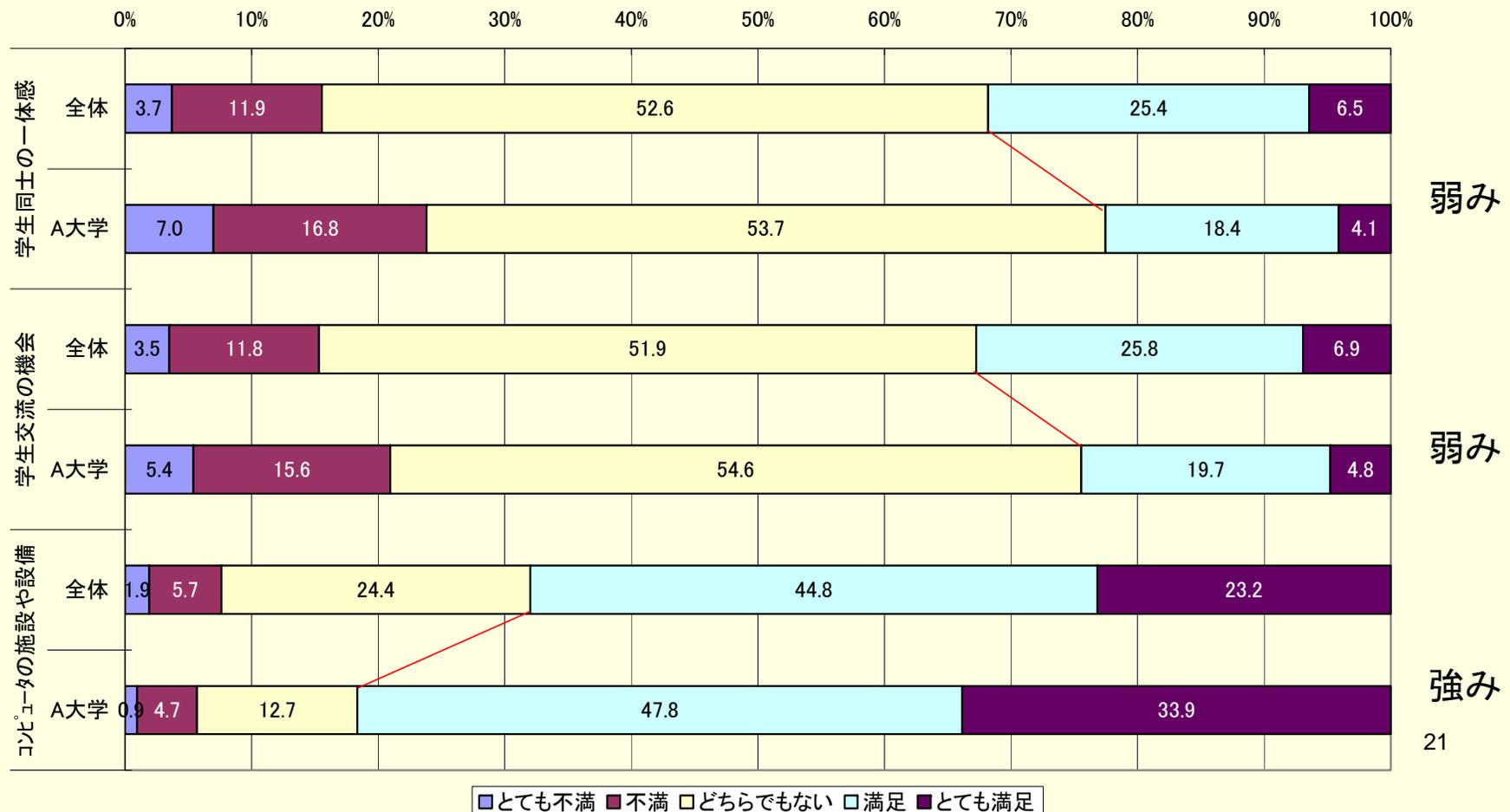
■ 活用事例

- JFS 2008のデータをベースに
- E(=環境)の効果はJCSSの継続的利用で確認を...

現在可能な分析1：全体集計との比較

■ 自大学の強みと弱みは？

大学の満足度(%)



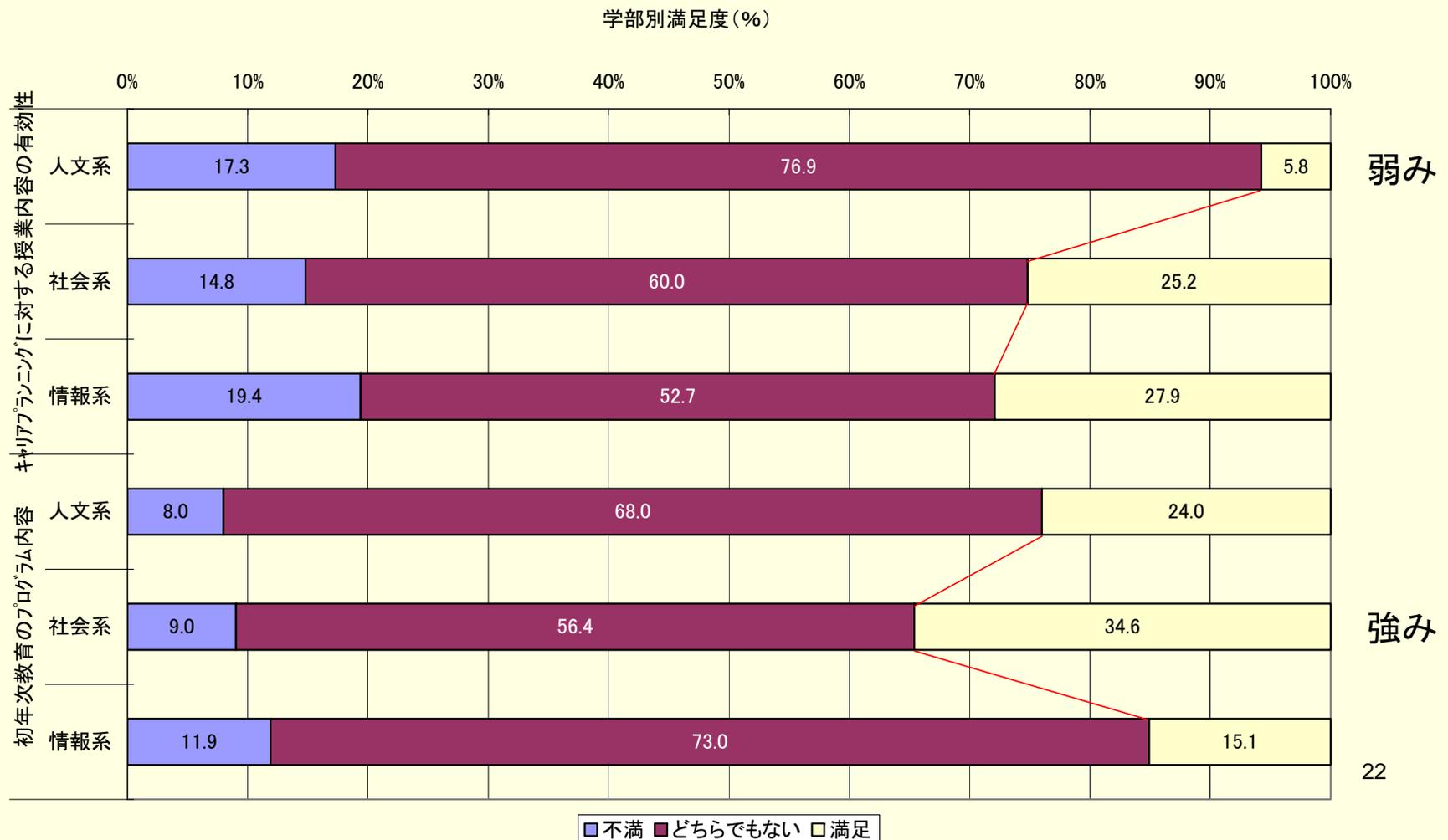
弱み

弱み

強み

現在可能な分析2: 学部間の比較

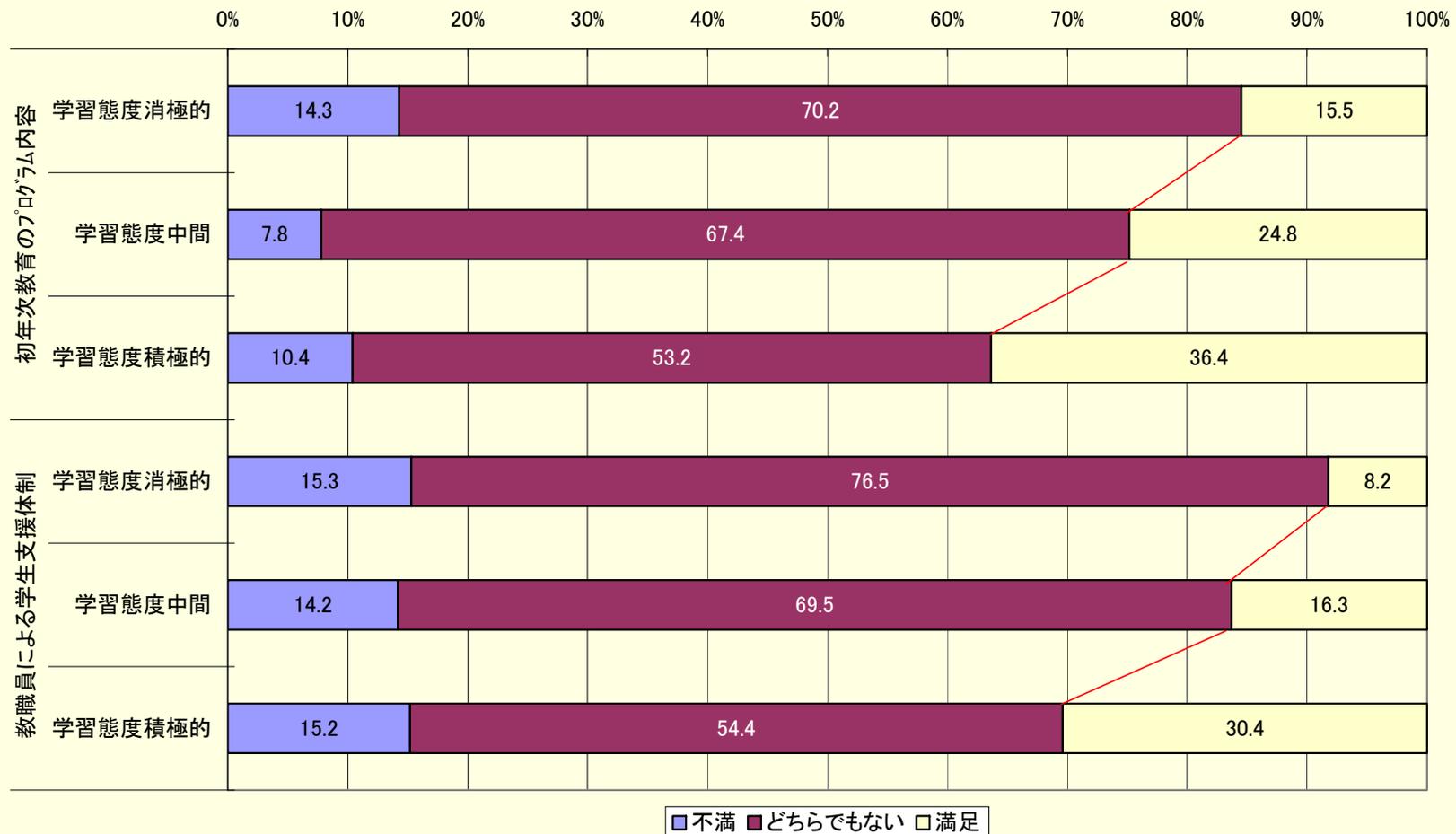
■ 自学部の強みと弱みは？



現在可能な分析3：学生集団間の比較

■ 学生の学習態度による差異は？（積極的 ⇒ 満足度高）

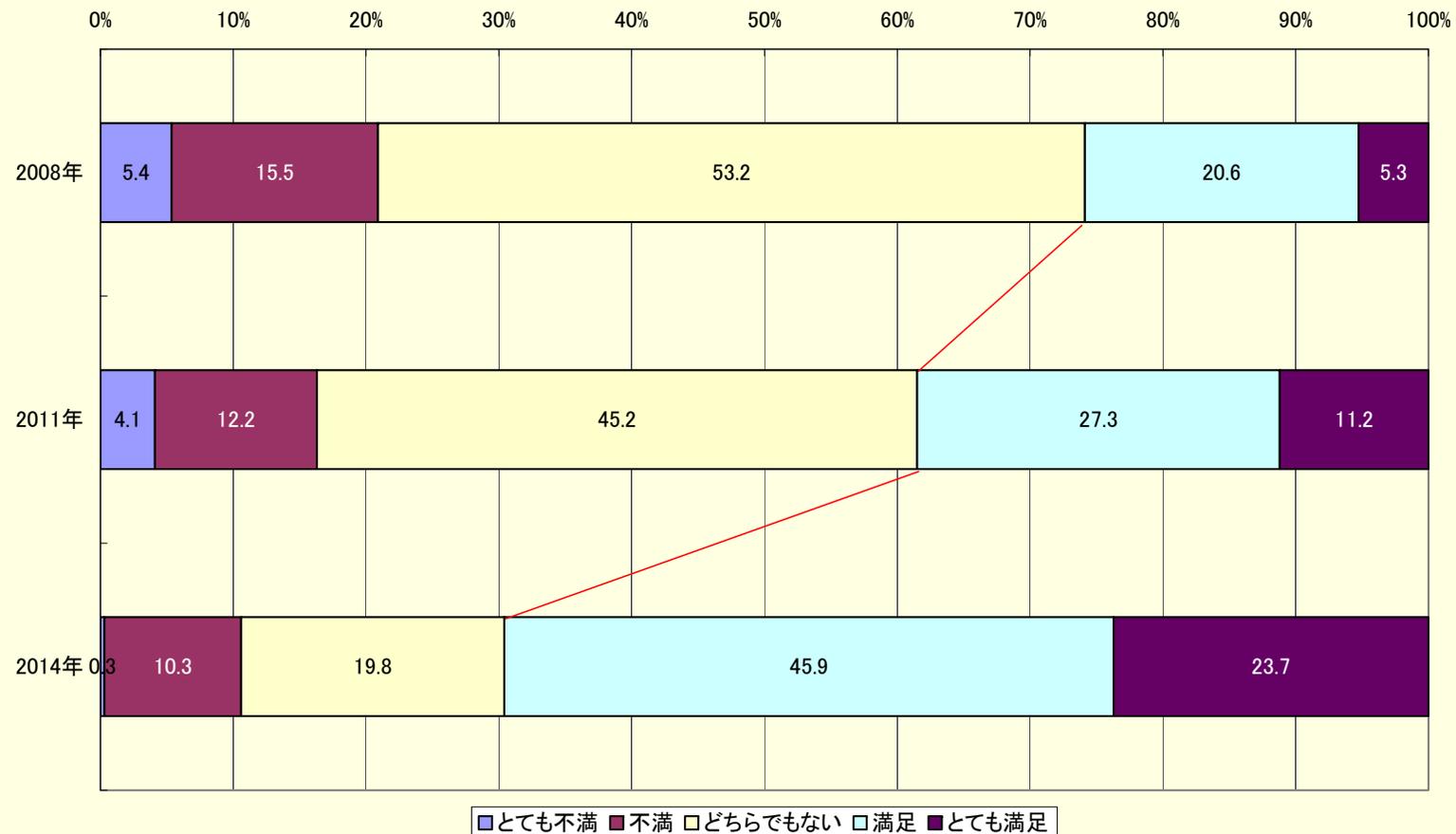
学習態度別満足度(%)



今後可能な分析1：個別機関の変化

■ 自大学の3年後、6年後は？（2010年からアドバイザー制を導入・・・）

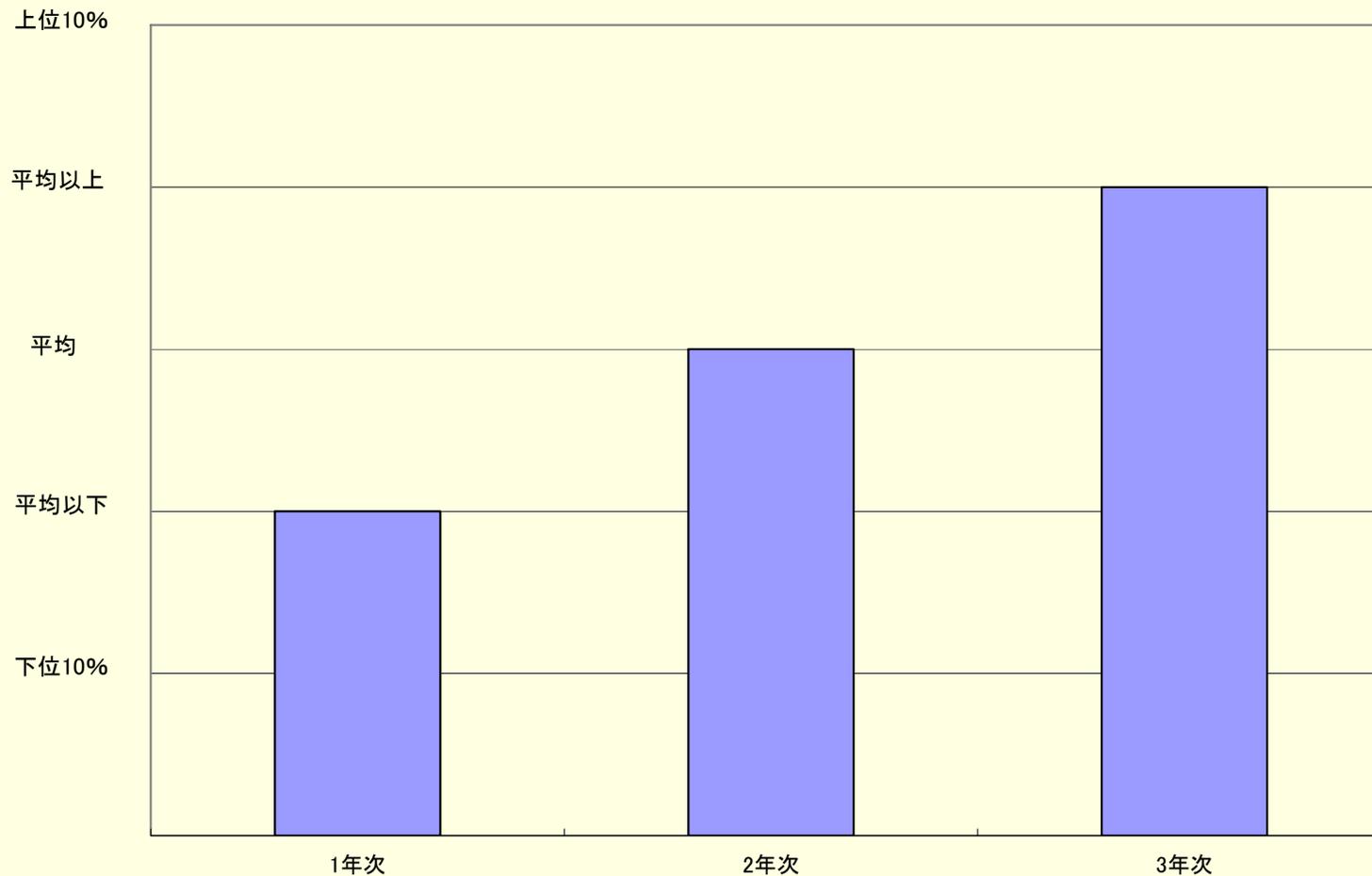
履修や成績に対するアドバイスの満足度(%)



今後可能な分析2: 個別学生の成長

■ 各学生の1年後、2年後の学習成果は？

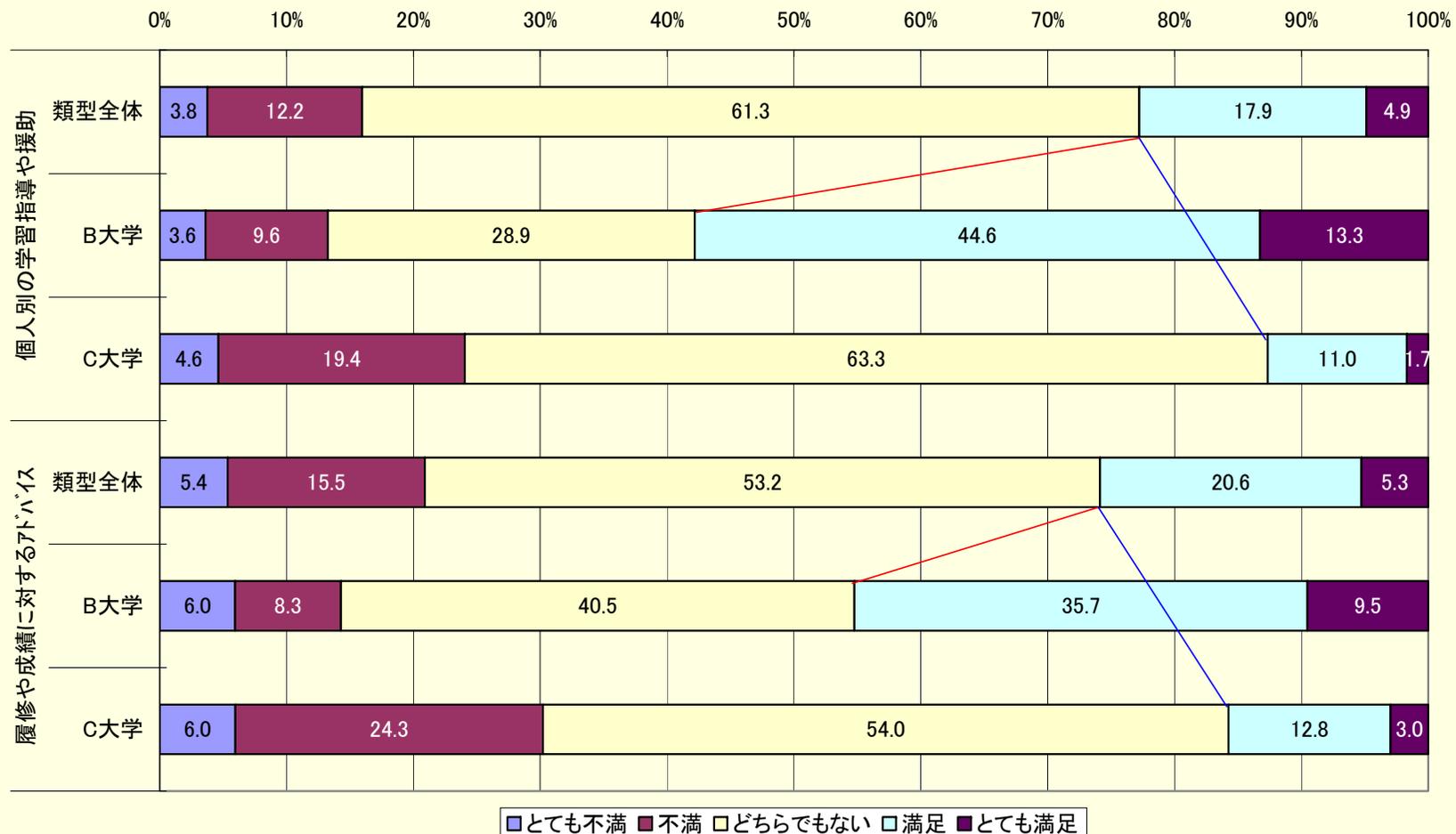
プレゼンテーションの能力の自己評価



将来的に可能にしたい分析1: ベンチマーキング①

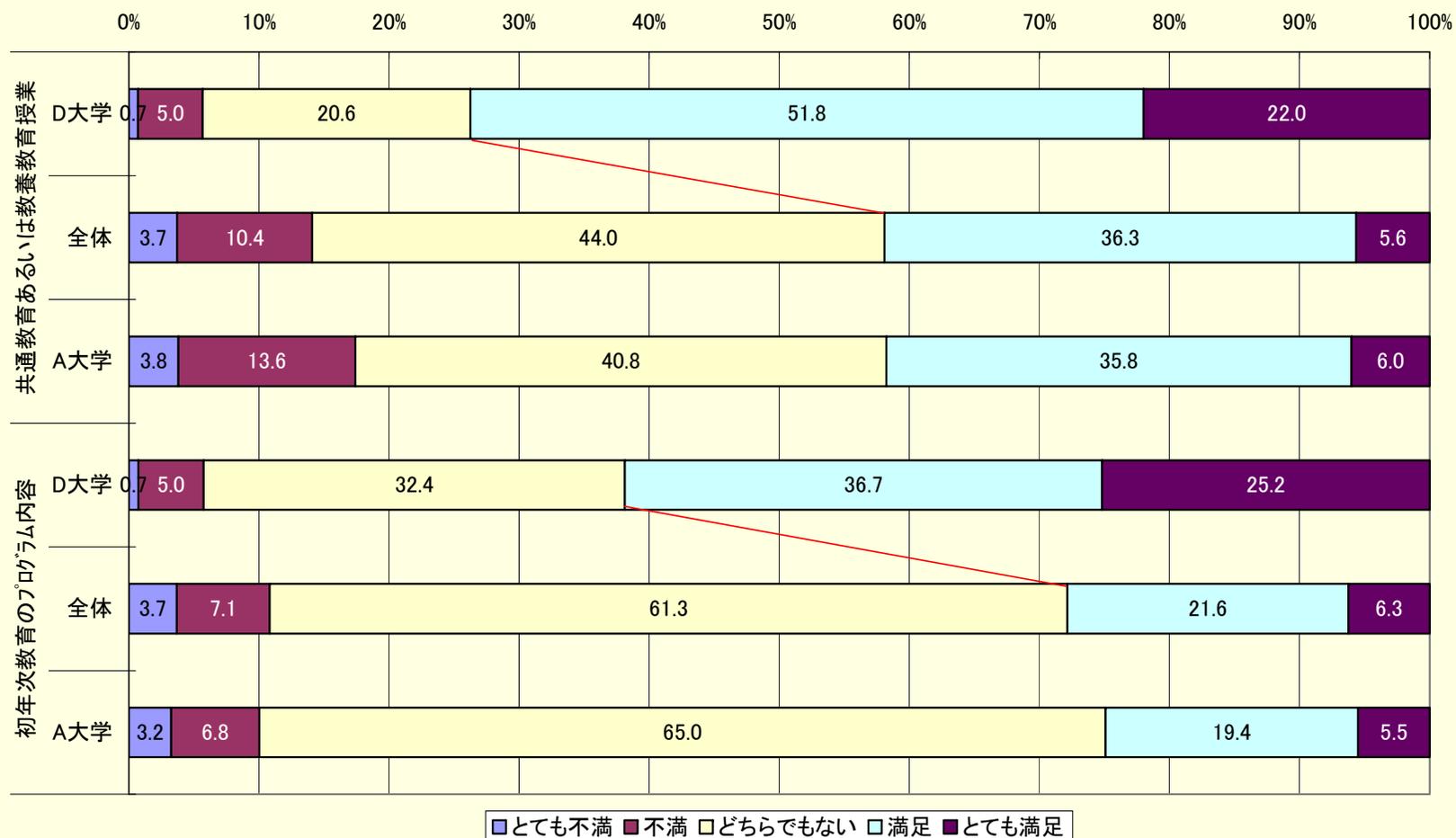
■ 同類型の大学と比較すると？ (Eの詳細についてはJCSSで比較)

工業単科大学の満足度(%)



将来的に可能にしたい分析2: ベンチマーキング②

- 高い成果を示す大学と比較すると？ (Eの詳細についてはJCSSで比較)



4. JCIRPの今後の課題

- 日本版調査に向けた更なる設問の改良
- 簡便で有効な分析方法の開発
- 運営にあたっての経費の負担

- 参加大学の拡大
- 各大学におけるデータの活用
(cf. IR部門の発展)

ただし、JCIRPはあくまでも間接評価のひとつ